

最前線ドクター 63人が解説

読

現代人に多い

病

本

気

北海道の医療最前線

正しい知識と対処法

特集

患者になる前に読む

医師選び

病院選びの心構え

医師が分かりやすく解説

現代人に多い病気

がん治療の最新

食べることは

生きることに

特別企画

頼れる病院

実力ドクター

2023年 H09月号 増刊  
(2023. 8.15発行)

定価 880円(税込)

# 糖尿病

治療薬の進歩で血糖マネジメントも良好。  
生活習慣ではなく個々の体質に寄り添った  
治療を選択

ともいわれていました。

2型糖尿病の原因は、患者さんの生活習慣が悪いことが主因と決めつけられ、生活習慣病と呼ばれていました。しかし最近では、血糖値が上がるのは患者さん個々の遺伝的素因、いわゆる体質によって、同じ生活習慣であっても糖尿病になる方と糖尿病にならない方がいるということが分かってきたのです。ですから両親や兄弟姉妹、祖父母や親戚に糖尿病の人がいる場合には、自分も糖尿病になりやすいと言えるでしょう。

そのため日本糖尿病学会や日本糖尿病協会では現在、生活習慣病という呼び方は社会的不利益につながるステイゲマ(負の烙印)らしくいん)であり、糖尿病に対する正しい理解を促す活動なども行いながら、生活習慣だけでなく、患者さんの体質が糖尿病の主要な原因であると捉えた診療に取り組んでいます。

糖尿病とは、血糖値が上昇することで網膜症、腎症、神経症などさまざまな糖尿病の合併症を引き起こす病気です。かつて糖尿病の方は、糖尿病ではない方に比べて寿命が10歳くらい縮まってしまう可能性がある病気

また、糖尿病の治療に関しても、以前はインスリンやSU薬(すい臓からインスリンを強制的に分泌させる薬剤)など、血糖値は強力に下げられるものの体重を増

やしたり、低血糖のリスクが高い薬が多く、やむを得ず食事療法や運動療法を厳格に行わなければならず、そのため血糖値が良くならないのは患者さん本人の努力不足であると責任転嫁されてきた時代もありました。

しかし、糖尿病治療の進歩は大きく、現在では、体重を増やさない薬、体重を減らしてくれる薬が開発され使えるようになりました。一つは、SGLT2阻害薬です。これは体にたまった糖を尿にたくさん出すことで血糖値を下げる薬ですが、エネルギーが体外に排出されることで同時に体重減量しやすくなる薬でもあります。

もう一つは、インクレチン(消化管ホルモン)関連薬です。食事を取ることによって小腸から分泌されるホルモンの作用を持つ薬です。このホルモンにはさまざまな良い働きがあるのですが、その一つが満腹中枢に働いて食欲を抑えてくれるというもので、満腹ホルモンと呼んでいます。これまでストレスをはじめ、さまざまな要因で過食が止まらなかったような方でも、インク

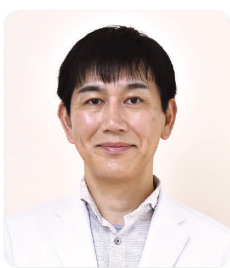
レチン関連薬を使うと、食欲のコントロールが比較的簡単にできるようになってきました。インクレチン関連薬は、1週間に1回の注射薬(自己注射)がメインですが、毎日1回、朝起きて飲み食べしていない空っぽの胃袋の状態のときに服用し、30分間絶食が条件となる経口薬も出てきており、患者さんが選択できるようになりました。

さらに最新のインクレチン関連薬には異なる2種類のインクレチン作用(今まで中心に使われていたGLP1作用にGIP作用が追加されたもの)をもつ「マンジャロ」が登場しました。今後さらに新しい薬剤の発売も控えており、糖尿病治療の選択肢は広がっていくものと期待しています。

私が医師になってから25年が経ちますが、かつて糖尿病は患者さん自身の生活習慣が原因となつて起こる生活習慣病であり、体重が減らせないのは本人の責任で、生活習慣の改善を指導することが治療の一つの考え方でした。もちろん生活習慣の改善も必要だと思いますが、今や糖

尿病の治療はかなり進歩し、エネルギーの排出を増やすSGLT2阻害薬と、エネルギーの摂取を減らすインクレチン関連薬の両方を用いることで、患者さんの負担を少しでも減らしながら、体重を意識した治療と良好な血糖管理ができる時代になってきました。

しかも、現在の糖尿病の薬は副作用も少なく、体重も増えないなど、使いやすい薬も増えており、私のような糖尿病の専門医でなくても、糖尿病の治療はより容易になってきており、血糖管理がうまくできている患者さんは多くいらっしゃると思います。ただ、ごく一部には難しい糖尿病もありますので、長い治療を続けているが、血糖管理がなかなかうまくいかないという場合には、一度は糖尿病の専門医に相談しても良いかと思えます。



さっぽろ糖尿病・甲状腺クリニック 理事長  
竹内 淳氏